

第6回新潟出版文化賞 受賞作品

※カッコ書き内は、(著編者名、住所、発行者) です

大

賞

芸者から、名歌手へ 小唄勝太郎の生涯 (児玉義男、新潟市、著者本人)

みなと町新潟市の花柳界で活躍した歌手小唄勝太郎の波乱に満ちた生涯を、プロマイドや唄とことばで綴る筆者渾身の力作。原稿用紙に手書きの文字に筆者の熱い思いが伝わる。

選考委員特別賞 (新井満賞)

行商マンが行く 一車いすで町に出る (乙川正純、新潟市、考古堂書店)

障害者用専用トイレの使いづらさ。優しさという名の差別。重度脳性マヒの著者が“重たい”日々を大上段に構えず、障害者である前に一人の人間でありたい、という叫びをパワフルに描いていて、読む人の心を捉えて離さない。

優

秀

賞

小説集 松籟 (志田憲弘、柏崎市、玄文社)

この人の作家としての力量は、井伏鱒二らとの交流、県芸術祭賞受賞等によって、十分に証明されている。それよりも、本の成立過程に強く引かれた。文学の同志と強い影響を受けた教え子と夫人へ亡夫への想いが、典雅な文学の実を結ばせた。「たらふくのんで」で、私は美酒に酔わされた。

中越大震災復興記念 「中野俣集落誌」 ～災害を越えて伝えるふるさと～

(中野俣集落誌編集委員会、長岡市、新潟日報事業社)

学校の文集には思い出がある。ふるさとに思い出を持とうという試みは、地震を機に実施された。禍から学ぶことがあると教えられたこの書は、人間の進歩につながると思う。

食は新潟にあり (本間伸夫、新潟市、新潟日報事業社)

本書は、ズバリ食生活の知恵袋。新潟の食文化を再発見させる好著である。伝統食や、新たに生み出された新潟の食文化の豊かさに驚く。

じよんのびよもやま日記 (小林康生、柏崎市、越後門出和紙工房)

じよんのびの里、高柳の風景が浮かんでくる文章、さし絵の温かさ、高柳で生まれ育った楮(こうぞ)による生紙の和綴じ本、三者が一体となって素敵な作品となっている。「郷土性」が突出しての受賞である。

記録誌部門賞

父と母の開拓団「五福堂」引揚記 ー無名の民草として生きてー

(残熊てるよ、新潟市、考古堂書店)

新潟県出身の満州開拓団の悲劇をあらためて認識させられた好作品。実直な父母の生き様。その記録をみて若者は逃避行のなかで生まれたことを知る。父母への感謝の書だ。

故里つばき 佐渡椿村落史 (萩野よしゆき、佐渡市、著者本人)

「地域を語るには地域を知ることである」、著書のそんな思いが伝わってくる。地域の史料をもとに書き綴られた本書は、個性的な村落史となっている。

糸魚川山里の文化と地域のあゆみ ー山村における農耕形体と居住環境を軸にー

(松澤静雄、新潟市、著者本人)

人生の軌跡とふるさとの歴史が重なっているとすれば、50年かかって調べあげたこの書の価値は高い。従来の郷土的な土台も織りこみながらの斬新な視点が重厚にしている。

新潟の地震

(新潟県高等学校教育研究会理科部会 新潟の地震編集委員会、新潟市、考古堂書店)

県内高校理科教員が新潟で起きた過去から現在までの地震について中越地震発生直後から執筆・編集した一冊。科学的見地にとどまらず、歴史的・人文的視点での解説は興味深い。

文芸部門賞

賀茂の半月 (小川龍、阿賀町、幻冬舎ルネッサンス)

美貌の官女の生涯が江戸初期の<時代>を細かく背景に織り交ぜながら描かれている。書き込まれたストーリーは面白く、何よりも著者自身が楽しんで書いているのが伝わってきた。正攻法で取り組んだ力作である。

竹やぶ 四号 ー古希記念号ー (竹内英三郎、上越市、著者本人)

季節の推移を通底音のようにして、医師である作者の日常が、過去、未来とゆるやかに呼応しながら語られている好エッセイ。選者は、エッセイを選ぶならこれだとメモしていた本。文中の写真、絵も自然体だ。五号を、心静かに待っている読者も、大勢いよう。

動物たちのかくれんぼ (阿部汐里、小千谷市、著者本人)

出版文化賞も6回目。隔年の開催だから、10年は経つ。こんな絵本が小さな奨励賞になってもいいなと思っていた。故人の十三回忌に連れ合いが、孫の汐里さんに追悼記念でつくらせたもの。小体の絵本だけど、絵も文も、書き加えられた詩も、写真もみんないい。癒し本の逸品だ。

酒虫 (齋藤達也、新潟市、考古堂書店)

朝に夕に一斗の酒を呑むという「酒虫」にスポットライトを当てた着眼点と、今年話題の大河ドラマをさりげなくからめた構成力はうまい。次の作品にも期待したいと思う。